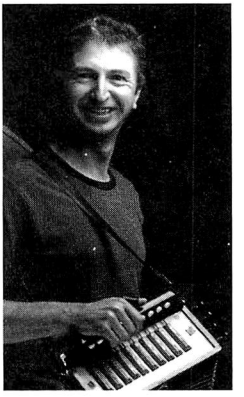
Never a Time Without Song

いつでも歌が

ジム・ペイン　Jim Payne

［森野 聡子 訳］



ジム・ペイン
（写真提供：ジム・ペイン）

ジョーイ・アントル（Joey Antle）という、プレセンティア湾（Placentia Bay）、フォックス・コーヴ（Fox Cove）出身の歌手が昔こんなことを言った。「よその家で主人に一つ歌をと頼まれたら、こっちが歌を知ってるってふんでるんだから、歌わないっていうのは失礼ってもんさ。」

そう、いつだって歌があった。物心つく前から周りには音楽と歌があり、子どもの頃から成人するまで、それが当たり前だと思っていた。島には電気がなく、交通手段といえば、春から秋にかけてはボート、冬は犬ぞり。こんな暮らしでは、歌（伝統的な歌も地元で作られた歌も）や音楽や物語を語ること、そしてダンス、これらすべてが北大西洋の荒涼とした海岸で孤立した共同体が生き残っていくために大きな助けとなったのだ。歌は船の上での作業歌「シャンティー」（shanty）として、あるいは娯楽として歌われ、地域で起こったことを記憶にとどめたり、海で亡くなった人を追悼する役割を果たした。

母や祖母やおばが揺り椅子に腰掛け、歌ってくれたことをおぼろげに覚えている。続いて子どもの歌、周りのおとなが歌うのを耳にもした。アコーディオンやフィドルが加わり、踊りが入ることもあった。子どものころ父は留守がちだったが、土曜の晩に家にいたら必ず音楽とダンス、物語と歌で我が家は沸きかえった。ベッドに入る時間になっても階段にしゃがみこんで耳をそばだて、台所で起こっていることを聞き逃

すまいとしたものだ。

伝統的な歌ばかりではない。父は人付き合いがよく、歌も大好きときていたから、仕事仲間と一緒にバラッドやコミック・ソングを作っては、海や伐採キャンプでの仕事、地元のニュースや人々のことを歌にしていた。両親について最初に覚えていることの一つは、地元のコンサートで二人が島の生活を題材にした寸劇を演じている姿だ。

母には別の一面もあった。村の女性の大半にとって、家の外での活動の中心は教会と救世軍で、この救世軍のメンバーがまた歌に熱心だった。母は教会でオルガンを弾き、子どもたちに賛美歌や子守唄や遊び唄を歌ってくれた。女性同士だと、おばや祖母が一緒だと特に、歌うのはバラッドで、内容はというと、大昔の人や出来事、超自然的でおどろおどろしい事件、海に出た恋人や夫の便りを待ちわびる女の悲哀や寂しさなどだ。男たちがほとんどの間、家を離れていることから、共同体の暮らしを守るのも、先祖のバラッドを次世代に伝えていく要となるのも女たちだった。

人前で初めて歌った記憶は教会で、4歳か5歳のときだ。我が家の前を通りかかる通行人にも歌ったりしていた。村中で祝われる、教会の祝祭日や記念日は、いつでも、村の人々の前で歌ったり演じたりする機会だった。こうしたコンサートは全員の食事から始まり、テーブルが片付けられた後ダンスとなる。我々子どもは、おとなが踊るのを見物したり、ジグやリールやワルツがアコーディオンやフィドルで演奏されるのを聞いたりしていた。ようやく若者の番がきても、じっと観察され、もしあまり上手でないと判断されたら、おとなの踊りを見る側に戻されるのだ。

高校に入る前に我が家は島を離れ、本土の村に引っ越した。そこには道路も車もあったが、電気がきたのは高校1年の時だ。それでも11歳のとき初めてギターを手に入れ、すっかり夢中になった。当初は伝統音楽ばかりだったが、ほかのジャンルに触れるうち、そちらも演奏したくなっていった。初めてバンドを組んだのは高校時代で、学校のダンス・パーティーや村のイベントで演奏した。時には小さなボートで1時間以上かけて島の村までいき、一晩演奏することもあった。演奏を終えるとメンバーで身を寄せ合い、朝の光がさすまで暖をとった。明るくなれば、ボートに乗って安全に家路に戻ることができた。この当時のバンドのレパートリーは、需要との関係で、伝統歌謡、ダンス用のインストルメンタル、それにカントリーと60年代のポップやロックが数曲ずつといった具合だった。大学に入って最初の2年間は、セント・ジョンズ（St. John's）周辺でもバンド活動をしていた。

大学で数年過ごすうち、トロント（Toronto）に働きに行こうと決めた。こうして生まれて初めて音楽が日常の一部でなくなった。我々ニューファンドランダーは、み

海へくり出すジム・ペイン
(写真提供：ジム・ペイン)

な故郷と分かちがたい想いで結ばれている。故郷の風景や人々のことが懐かしくなるとともに、失って一番つらいのは自分たちの文化なのだと気づいた。それこそが我々を一つの民族として形付け、我々のことを物語り、極北の地に生きる我々を支え、幾層にも積み重なった歴史を持つ、しっかりとした大地を踏みしめる力を与えてくれる。こう悟った自分は、ニューファンドランドに戻り生活する道を探そうと決意した。音楽で暮らしていかれるとは夢にも思わなかった。

伝統音楽に囲まれて育つうち、文化の持つ伝統的形式は、昔と変わらぬ卓越した役割を持ち続けると考えるようになった。予測を上回る急激な変化が我々の社会に訪れた。北米の他の地域に追いつこうとがむしゃらになり、北米社会という大きな世界の一員になろうと焦っていく中、伝統的な文化様式を捨て支配的文化を受け入れることが良しとされた。けれども幸いなことに、ニューファンドランドの多くのアーティストが、分野を異にしながら、この波を乗り切っていった。

1970年代の地域文化再生の動きの中で、とても興味深い出来事が起こった。伝統文化と直接のつながりを持つ者はすぐに聴衆を獲得した。音楽や歌や物語やダンス曲、

我々の暮らしの常に一部だったこれらに、まるで帰りを待っていたかのように人々が飛びついてきたのだ。一方で、前の世代の素材を集めたり、出版したり、記録したりして、彼らがいなくなり、文化的功績が永遠に失われてしまう前にレパートリーを保存しようという者も現れた。演奏する側としては、自分たちがいつもやってきたこと、両親や祖父母がやってきたことをくり返しているにすぎなかった。

我々の文化的伝統が共同体の中で果たしてきた役割を理解することは、民衆文化について、よりホリスティックな見方を生んだ。海の悲劇を歌うバラッド、幽霊話や昔話、インストルメンタルのダンス曲、それぞれに、ふさわしい時と場があった。そして、歌い、語り、ダンス音楽を奏でる人々は、すべて文化伝統の同じセットの一部であり、ある時は耳の肥えた聞き手として、ある時は演者として、その文化のあらゆる相に通じていた。

しかし時の流れとともに、ライフスタイルが変わって近代化されることで、このように文化をホリスティックに実践する機会は断片化され、文化のある形式だけを偏重する傾向が現れた。「スター主義」という現代文化のけばけばしい風潮と相まって、伝統文化の演者は、批評家がポップ音楽をジャンル分けするのと同じように、自分たちにブランドを付け始めた。伝統文化と直接の関りを持たず、成長してから接するようになった人ほどそうで、自分のお気に入りを一つ二つ決めてしまうのだ。ニューファンドランドでストーリーテラーと自称する人物に会ったら、ストーリーテリングとはじかに関りを持っていないとすぐわかる。この地の伝統では、誰も自分のことをそのように呼ぶことはないからだ。あなたは文化全体の一部であり、文化の特別な一部ではない。

今日、アカデミック・サークルでは特に、伝統文化研究のおかげで、人々は他の土地のエキゾティックな文化を理解しようと世界のさまざまな場所に赴くようになった。我々が住む世界を理解するために重要な活動であり、世界中の人々の差異に敬意を表するという態度を育んできた。しかし、その一方で文化の実践者をカテゴリー分けすることが行われ、とりわけ、伝統文化がコミュニティの生活の必須部分ではなくなっている地域では、その傾向が強い。たとえば、伝統的芸術様式を実践したり、伝統的活動を行っている人を指して「伝統継承者」(tradition bearer) という用語を使うのを耳にするようになった。ニューファンドランドに暮らす身には、この名称が意味するのは、その社会では伝統が失われてしまった、だから、皆さん方の伝統とはこのようなものでしたよと人々に思い起こさせるために特別に任命された人物が必要だと言われているように感じる。伝統が力強く生きていることを誇れる地域に住んでおり、

そこでは、新しい芸術が伝統的様式や実践を活用して創り出されているから、すべてのニューファンドランダーは、伝統を生きているという意味において「伝統継承者」であると言いたい。すべてのニューファンドランダーはストーリーテラーであり、たとえ自分では演じなくても、全員が自分たちの音楽伝統の大切さを知っており、先祖の暮らしについて音楽が教えてくれることを大事にしている。我々の誰もが音楽のリズムに自然と反応してしまう。陸や海での日々の労働のリズムから発展し、この地の厳しい環境で生きることを切り開いてきた中で生まれたものだからだ。我々の体にしみ込んでいて、抑えることはできない。

我々伝統社会の住民は、歌い、物語を語り、楽器を奏で、ボートを作り、民間療法に精通し、そのような形でコミュニティ内に各自が居場所を持っていたが、自分が何か特別のことをしているとか、共同体の存続のために人よりも重要なことをしているなど考えてはいなかった。自分が共同体に対してできることをしただけであり、男なら猟や漁業の腕があること、女ならウールを織ったり紡いだり、バターを作ったりできるのと同じことにすぎなかった。すべての技量が、生活のためであれ娯楽のためであれ、同じように大切なものとみなされていた。世代から世代へ伝統を伝えていくことがいかに重要かを学ぶとともに教わったのは、おのおのの世代が代わる代わる自分たちの世代の物語を語る歌や語りを創っていく責任があり、それが我々の物語を伝える連続性に貢献していくということだった。だから、我々の物語は決して、本当の意味で完成することはないだろう。常に新たな世代が現れ、昔の歌や物語を歌い語りつつ、新しい物語や歌を作っては未来の世代の伝統の一部を形成していく。だから、いつでも歌があったと思うし、楽観的なのだ。少なくともニューファンドランドには、これからもいつも歌があるだろう。